日　時	令和 6（2024）年 2 月 22 日（木）
場　所	幸田町教育委員会
出席者 （敬称略）	（仮称）幸田町郷土博物館建設検討委員会 黒柳孝夫（愛知大学 名誉教授）　※委員長 荒井信貴（愛知学院大学 講師） 武村雅之（名古屋大学教授） 岩下英司（深溝小学校 校長） 池田和博（幸田町教育長） 幸田町教育委員会　文化スポーツ課 菅沼秀浩（教育部長） 夏目守雄（次長兼課長） 神取龍生（文化 G グループリーダー／主任主査） 志賀光浩（スポーツ G 特命専門員） 株式会社　丹青社 森　富弘 﨑山幸子 久保はるか
目　的	第 4 回委員会

I. 開会挨拶

・ （委員長）過日、基本構想案が公開された。まだまだ道のりは長いが、粛々と進めていただきたい。しかし静かに委員会を運営するのではなく、町民に博物館構想を認識していただくことが重要だと考えている。本日は、博物館基本構想案について、また、来年度基本計画をつくる上での望ましい体制や配慮すべき事項についてもご意見をいただき、今後に向けての課題を確認していきたい。

1. 配布資料の確認等

・ （委員長）配布した前回委員会の議事録について、ご意見はない様子である。確認は以上とさせていただく。パブリックコメントについて
・ （事務局）2024 年 1 月 16 日から 2024 年 2 月 15 日まで、パブリックコメントを町のホームページで公開した。町民からの意見は特段なかった。

II. （仮称）幸田町郷土博物館基本構想について

・ （事務局）前回からの主な修正点等、資料説明
・ （委員）P.22「フェーズ 3：感動する」の項、「新博物館は、国宝や重要文化財をはじめ、他館から優れた歴史資料や芸術作品などを借用して……」とあるが「芸術作品なども借用して……」ではないか。先に言及されている幸田町の重要文化財に加えて、ほかから持ってくるので「……も」が適当だ。「……を」だと全部借りてくるというイメージになる。

2. 今後の流れについて

・ （事務局）今年度いっぱいで、基本構想は終了である。本日いただいたご意見をふまえて再度微調整する。修正は委員長に確認して進める。次年度は基本計画になる。展示内容を含めて一つず

つ、検討する。1 年かけて詰め、同時に周知も進める。委員会は来年度も 4 回程度の開催を想定している。全体会議とは別に部会も検討する。基本計画のあと、令和 7 年度以降、順調にいけば設計の段階に入る。令和 7〜8 年度は実施設計を進め、令和 10〜11 年度ごろに博物館開館という予定になっている。当初のスケジューリングを念頭におきながら進めていきたい。

- （委員長）基本構想については、本日出たご意見を整理、微調整の後、町長にお渡しする。
- （事務局）いただいたご意見をふまえて最終版を作成し、ホームページで公開する。今回で基本構想をつくる上での検討委員会を終了とする。来年度、6〜7 月頃が第 1 回委員会になると思うが、詳細はメール等で調整していきたい。

III. 基本計画に向けて

3. 部長会でいただいた意見

- （事務局）過日、町長をはじめ、役場内各部署の部長たちに基本構想をかいつまんで説明し、周知を図った。部長たちの反応や意見は次の通りだ。
  - パブリックコメントの意見がないのは、関心がない、情報が多すぎて具体的に何をしようとしているのかが分からないということではないのか。
  - p.17「知の観覧車」の図にさまざまな資料が記載されているが、出土品と、文字で構成されたパネルが並んでいるイメージしかできない。具体的に何をどう展示できるのかが町民には分からない。博物館でワクワクできるといっても、何をもってワクワクできるのかが分からない。
  - 体験展示や映像について言及されているが、何をどのように展示するのかが町民には分かりにくい。どのような資料が幸田町にあるのかを示してほしい。施設ありきのように感じる。
  - 委員会メンバーについて、女性を含めた町民の視点、また、教育だけでなく、行政の視点も入れると、現実的で具体的なものができるのではないか。
  - 常設展示だけでなく、企画展等の工夫があると、何度も足を運べるのでよいのではないか。
  - 青塚古墳の刀剣等の文化財があるといっても、何十億ものお金をかけるほどのお宝が幸田町にあるのか。少しスペースを作って展示すればいいのではないか。
  - 部長たちからは「一回いけばいい」とならないためのご意見をいただいた。「企画展や知られていないが価値のある物が存在するという情報がほしい」、「物であれば見るのだが、文字をパネルにしただけはつまらない」等。

4. 「ワクワク感」のアピールについて：展示・教育普及活動

- （委員）パネルが文字ばかりであっても、その前に話す人がいればよい。人員の問題もあるので難しいが、代えられるような何かがあればよい。また、まず自分たち自身が「ワクワクする」必要がある。厳密さや細かさはさて置き、面白いということを伝える人が必要だ。説得できるし、分かりやくなる。
- （事務局）本日欠席されている神谷委員から次のようなご意見をいただいた。「p.40 に記載されたような時代の分け方もある。時代区分から入るのか、事象から入り時代を見ていくのかについては、基本計画の段階で検討するといい。古墳時代があって古墳があるのではなく、古墳があっての古墳時代がある。たとえば、窯があって、中世がどういう時代なのかを見ていくのも一つの見方だ。」神谷委員のご意見も基本計画の課題としたい。
- （委員）分かりやすく伝え、興味を持ってもらう必要がある。
- （委員）学校の教科書は文字ばかりでつまらない。大掴みでも、多少間違っていても、かまわない。規制にとらわれずにはみ出していろいろなことをいえば、面白くなるのではないか。
- （事務局）神谷委員から「展示の際、通史にこだわると、資料のない期間は、文字と写真のパネルになる。それは楽しくない。だから通史にこだわる必要はないのではないか。そのあたりは基

本計画で触れないといけない」とのご意見をいただいた。

・（委員）どこの時代の何が売りになるのかを、こちらから具体的に提示する必要がある。

5. 「ワクワク感」のアピールについて：広報 PR 活動

・（委員）博物館構想はきちんと書いていただいたので、ワクワクのヒントを町民に与えていくことや、今回の問いかけに答えていくことが、次のステップになるだろう。

・（委員）構想のなかに出土したものなどがイメージとして入っているとよいかもしれない。

・（委員）町民にアピールするには、例えばビジュアル付のダイジェスト版があるとよいだろう。もう少し具体的な展示に関しては、基本計画段階で検討すべきだろう。

・（委員）今まで知られていない幸田町の文化財を毎月少しずつ見せながら、博物館構想につなげていくといったアピールが必要だ。アピール・広報をしっかりしないと、町民の要望にはつながらない。博物館ができてほしいと思わせるような手段を考えることも、自分達の仕事であろう。ただ博物館をつくる、いいものができると言われても、何だか分からない施設に何十億ものお金をかけるより体育館にエアコンを入れてほしい、といった町民の感情もよく分かる。よいアピールをしなければ、町民の理解は得られない。

・（委員）幸田町の内外の方たちに幸田町の歴史について理解してもらうことは大事だと思っているので、我々のミッションを実現に結び付けていきたい。そのためにも、いい意味で PR 活動をしなければならない。質問や疑問に一つひとつ応えていかなければ、ただ作りたいだけだと思われてしまう。町民の優先事項としては総合体育館という議論もある。体育館の構想は進めていけばいいが、だからといって博物館はいらないという話ではない。博物館についてやるべきことを粛々と進めていくと説明はしたが、体育館を優先する意見が半分以上あるという肌感覚がある。体育館と比較すると人の活動が見えにくい。博物館ができることや役割を町民にアピールしない限り、町民の理解が得られず進まないと危惧している。町民が必要とするものに関する意見もふまえつつ、何とか博物館構想を実現したい。体育館が優先され、博物館が先送りになるということにならないようにしたい。だから、博物館ができてからワクワクするのではなく、博物館ができること自体がワクワクするようなアピールが必要だ。

6. 「ワクワク感」のアピールについて：アピールの方向性

・（委員長）博物館は「町が自立している」象徴になるだろう。70 年史に関わっているが、幸田町はほかの地域の衛星的な位置づけとなっている。今もそのような意識が町民にある。町民に歴史を意識いただく機会がほしい。歴史とは、物語である。過去を意識し、どういう物語を描けるかということが、その人の郷土愛につながる。

・（委員）幸田町は合併されずに存在しているだけでもすごいことだ。そのような意識を皆が持つべきだ。それを持たせるための先導的な役割を博物館が担うべきではないか。

・（委員）それだけではないが、そういう役割もあってもよいだろう。

・（委員）幸田町は、独自性があまりなく、衛星的な存在となっているように思えるが、幸田町で生まれ育った者として幸田町を誇りに思いたい。幸田町はいいところだ、歴史があるところだというアピールが必要で、そうしたい。博物館ができたとしたら、町民として嬉しい。自分の両親は九州の出身であるため、親戚から幸田町の話を聞いたことはない。博物館で町の歴史や文化を知ることは、町民の誇りを持つきっかけになる。『三河雑兵心得』という本をいま読んでいる。たまたま本屋で見つけて、六栗や野場等の地名を見つけると、読みたいという気持ちになる。そのような愛着のようなものが、これからの幸田町を考えると大事なことだと思う。これからも人口が増えるという話になれば、なおのことだ。

・（委員）70 年史作成にあたり、過去の「議会だより」を読むことがよくある。合併問題が上がったころの議会の町長への一般質問に関する記事を読むと、幸田町は自立した道を歩むという話であった。この先にあるのは幸田「市」で、人口 5 万人を超すイメージである。その文脈でい

うと、幸田の歴史が前に出てくる町になってほしい。現在の幸田町は、古い建物が残されていたら、使い道がないから壊して新しいもの作ればいいと考える風土になっている。町の足跡を重視する気風があまりない。ちゃんとした町に行くと、古いものの中から新しいものを生み出している。過去を振り返りながら、それを町の誇りとし、新しい時代に使うということをやっている。幸田には人を連れていく場所がないという話になる。それは幸田町が自立した町になっていく上では寂しいことだ。モノがないという話だが、身近に感じる機会が今までになく、知らない人が多いのではないか。

- （委員）その裏返しである。これまでは、町民が幸田町で町の足跡を感じる重要な資料を見る機会が少なかった。だからこそ、このような施設が必要だという論法になっている。
- （委員）たとえば、彦左衛門の手紙を実際に見るのは貴重な体験だ。そのような貴重品を幸田町に展示する場所がない。だから出会う機会がない。出会いの場をつくるということが博物館構想の中にある。幸田町が貴重品を出し惜しみして見せなかったというわけではない。よそから借りたもの等を含めて、地域を見せていこうということだ。皆にもう少しこの博物館を身近に感じてもらえるように、この委員会でも努力してアピールしていくことが重要だろう。
- （委員）私は岡崎市にずっといる。岡崎は「どうする家康」でやっと知られるようなイメージがあった。岡崎はずっと「西三河の中心」という発想でやっているが、実は違う。北野廃寺の時代は「西三河の中心」だったが、それからずっと後の江戸時代、岡崎城はせいぜい五万石で、西尾のほうが六万石で上だった。明治時代になって三龍社という繊維会社ができ、西三河から女工さんが集まるようになって交通網が岡崎中心で動き始めたおかげで、やっと「西三河の中心」になった。しかし今では、岡崎を経由しない交通の便がよくなり、岡崎に人が集まらなくなっている。こういう現実の中で、歴史を理解して、どうやればもう一度「西三河の中心」になれるのかと発想を変えていくことが大事だ。岡崎は東日本と西日本の縁辺に位置していたため、東日本の情報も西日本の情報も入る。このような情報のジョイントであるという特性を活かしながら、次の町の展開を考えていくと違ってくる。このようにきちんと歴史を見ることによって、さまざまな役割を見出すことができる。その役割の中でどれがよかったか、どういう役割がこれからに繋がるかという見直しをするよい機会であると思う。
- （委員）幸田町には、ほかにはない魅力がたくさんある。しかし、それがまったく「見える化」されていないから、幸田町には何もないと思われている。このままでは幸田はいい町にならない。自分たちで歴史的な財産を掘り起こして、それを共有する場が必要だ。
- （委員）外からの評価を伝えるのも重要だ。
- （委員）アピールするものを作っていくというのも大事だ。以前はただのお墓だった本光寺は、今や国の史跡となっている。それは、多くの人が調査して、価値をつけていくことによって、文化財として見られるようになったからだ。そのようなものを掘り起こして価値をつけていく作業をする役目が、博物館にある。価値あるものがないのではない。このような発想で、価値あるものを探し、価値づけして、皆が誇れるようなものにしていくという役割が博物館にあるということを町民に知っていただく必要がある。

7. 「ワクワク感」のアピールについて：売りになるモノ

- （委員）どういう収蔵物が幸田町にあるのかをアピールしなければならない。売りになるものがあって、そこに変化がなければ、繰り返し足を運ぶ気にはならない。その点も鑑みて、町民がほかに何を望んでいるのか、行政がより効率的にするためにどうするかといった視点も入れると、よりよいものができ、現実的なものに近づいていくのではないか。
- （委員）青塚古墳は西三河の中では唯一の前方後円墳で、九州系の文化が取り入れられている。九州系の石室が入っているということは、大きな世界の流れの中で人と人との関わりがあったはずだ。そのようなパイプを見直してみれば、九州との結びつきがまだあるといった発想も考えられる。現在、さまざまな地域から幸田に来た人もいるだろう。博物館は、そのような人たち

にとって、何も関係がないと思っていた幸田が、それなりに関わりがあるということを探せる場所になるのではないか。

- （委員）幸田町には屋敷を含めて城が 20 あるという。歴史的に見て、ほかにはない数だ。
- （委員）幸田町は、石畳が昔塀だったものが倒れたものだったり、修復する土塀が三河地震で壊れた状態で今も残っていたりするのが、面白い。幸田町には、そういうものの痕跡やそこからたどれる歴史がある。そこをアピールするとずいぶんイメージが変わるのではないか。

8. 「ワクワク感」のアピールについて：イベントの実施、「広報こうた」への掲載等

- （委員）たとえば、街歩きのイベントができるといい。部長たちを連れてツアーをやってみるのはどうか。ツアーコースに断層や本光寺を入れると面白いだろう。断層の角にある小学校なんてそうそうなく、歴史的に素晴らしいことだ。そのような危ないところがあるというのではなく、興味を持ってもらえるように仕向けるとよい。断層の話であれば、「三河凸凹地形さんぽ」が使えると思う。幸田町の史跡になっている断層から歩いて、本光寺、蒲郡まで行っている。
- （委員）そのような企画をやってみるのもいいだろう。
- （委員）数年前まで、文化財マップに沿った街歩きを開催していた。街歩きをすると、いろいろな発見があって、町民の評判が良かった。そのような企画をくりかえしやるのは効果的だろう。
- （委員）今回はそのイベントに、博物館建設プロジェクトのアピールも意図的に追加するとよい。
- （委員）出土品について説明する際、人の営みを絡めた説明でないと面白くない。三河地震であれば、聞いたことのある人は多いので、そういうものを利用できればよいと思う。
- （委員）私は陶片だけでも面白いと思うが、関心のない一般の人にとっては面白くない。そのような人がたくさんお見えになることを想定し、興味を持つ人を少しでも増やしていくといった方法がよい。
- （委員）陶器の破片が面白いのであれば、面白いポイントを、熱意をもって伝える必要がある。
- （委員）幸田は歴史や文化に関心のある人は多くない印象がある。しかし、昨今の講座等には多くの人がくる。
- （委員）70 周年記念の講座でも、町長等から博物館の必要性について、歴史好きの方々にアピールしていただいた。あの時、これまでに一番大きな反響を得られたが、会場にいた人たちは、もともと歴史や文化に関心がある百数十人だった。42,000 人のうちの半数くらいの人に、博物館の必要性を感じてもらう必要がある。体育館の場合は、25,000～30,000 人くらいの理解が得られるのではないだろうか。
- （事務局）知っていただくための努力やアピール、PR 活動について、街歩き等や史跡巡りも含めて検討する。これまでに開催した街歩きイベントをふまえ、町中全部を巡りいろいろな発見ができるようなコースをつくっていきたい。少しでもアピールしていけるような取り組みが必要だ。
- （委員）できてからやるというのではなく、できるまでに進めていく必要がある。
- （委員）普通に開催するだけだと、以前と同様に街歩きが好きな人しか来ず、本当に来てもらいたい層は来ない。学校とタイアップするといった工夫が必要だ。

9. 「ワクワク感」のアピールについて：「広報こうた」への掲載等

- （委員）広報は、どこの家庭も見るであろう。p.17 に記載された文化財について、広報に写真とテキストで紹介してはどうか。部長会議で提出できる。まずは知ってもらうことが大事だ。
- （委員）たとえば、徳川美術館にある浄土寺から出土した壺のカラー写真を掲載して、それを見て何を感じるかをディスカッションしてみたい。
- （委員）いま、幸田にない資料や幸田で扱っていない資料のリストを作り、博物館ができたら、このような資料を展示できる、幸田にこのようなお宝があるということを広くアピールしていかなければならない。一般の町民や町外から移住してきた人たちに、本光寺の見どころは、紫陽花だけではないということを伝えるといった、幸田に愛着を持ってもらうための努力が大事だ。

難しいことは一からやるのではなく、既存の資料を活用して体裁を整えて毎月紹介すると、それを楽しみにしてくれる人が現れるだろう。広報で、幸田町の文化財を掲載したことはある。広く浅く周知活動して、博物館をつくることを後押しする仲間を増やしたい。

- （事務局）何回やってもよい。今まで広報に出したものは指定文化財のみであるが、報告書に掲載しているものはそれだけでない。史跡についても広報に掲載しているが、写真は掲載していない。基本的に文字だけだ。写真が載るとすれば、新規に文化財に指定されたもの程度である。
- （委員）広報に、p.22 の「家忠日記」や「三河物語」等の資料が、今どこにあって、どのような状態であるかを写真付きで紹介していくとよい。博物館ができると、そういったものが一堂に会して見ることができるということを、何号かにわたってちりばめていけばよい。青いガラスが、今どこにあり、どういう状態なのかについて、常に博物館のことをベースに置きながら紹介していくといったことが、部長さんたちをひっくるめて、人々を説得する材料になる。
- （委員）まずは役所の人たちを仲間にする必要がある。いちばん協力してもらわなければならないのは、役所の人たちや議員だ。
- （委員）紙媒体だけでなく、電子媒体でいつでもアクセスできるようなものが、町内ホームページにあれば伝わる。作業としては広報と同じだろう。少しずつ追加して紹介していけばよい。
- （委員）学校には、ビラを配布していただけるのだろうか。親御さんも若いので、アピールになるのではないか。電子媒体は、お金があまりかからないといったメリットがある。
- （教育長）教育委員会を通す必要はあるが、配布は可能であろう。紙媒体と電子媒体の併用はよいと思う。

10. 基本計画の検討委員会について

- （委員長）来年度は基本計画の段階となる。検討委員会の体制は現段階と同じとするか、増やすか、ご意見いただきたい。
- （委員）委員の増員や選定基準等については、事務局で話していただきたい。役職ではなく、人物を見て選んでほしい。委員会の今後のあり方については、今後も検討いただく。
- （事務局）去年 11 月に構想の途中段階として、議会で議員に説明している。6 月より 4 か月に 1 回のペースで具体的な話を進めていくことになっている。
- （委員）議会と情報交換を密にして、一緒になって進めていくべきだ。
- （事務局）行政の立場からの意見については、部長会等を活用できるだろう。この場に加わっていただいても、逆に意見をいただきにくくなるかもしれない。
- （委員長）女性町民の意見も重要だ。2 名くらいはいた方がよいのではないか。
- （委員）「率直な意見を言っていただける人がよい。まったく意見がない人はおらず、誰でも求めれば意見を言ってくれる。言いやすい環境を作ればよい。
- （委員）長い期間の事業となるので、2〜3 年スパンで議論に入っていただける人がよい。

11.総括

- （委員長）気を引き締めて皆に分かりやすく伝える必要を感じた。まだ道のりは険しいが、皆様のご協力をいただいて、いい形で基本計画につなげていきたい。また、町長とも話をしていきたい。

IV. 閉会挨拶

- （教育長）今年度、一年間、さまざまなご意見をいただき感謝する。丁寧で真面目な基本構想ができた。これをもって次のステップを進めていければと思う。次のステップに進むことを念頭に置きつつ、新博物館ができてはじめて、われわれの意見が反映されるということにつながっていく。まだまだ山があるが、少しでも理解してもらいながら、よりよい施設ができるよう、今後も協議をすすめていきたい。